

幻影師 アイゼンハイム

2008(平成20)年6月8日鑑賞(数島シネポップ)

★★★



監督・脚本=ニール・バーガー/原作=スティーヴン・ミルハウザー『幻影師、アイゼンハイム』(『バーナム博物館』白水Uブックス所収)/出演=エドワード・ノートン/ポール・ジアマッティ/ジェシカ・ビール/ルーファス・シーウェル/エディ・マーサン/ジェイク・ウッド/トム・フィッシャー/カール・ジョンソン(デジタルサイト、デスペラード配給/2006年アメリカ、チェコ映画/109分)

第2章

愛し方、愛され方はいろいろ

…… 19世紀末のウィーンを舞台に展開されるイリュージョン映画の大テーマは、「幻影の中に事実がある」！ 原作にはない、『うたかたの恋』(69年)で有名なレオポルド皇太子や、美しい公爵令嬢が登場する恋物語(三角関係?)も、サスペンス含みで興味津々。俺は絶対に騙されない！ そんな自信を持つあなたは、最後の最後の結末にアッと驚き、自らの敗北を悟るだろう……。

🎬 インディペンデント映画ここにあり！

現在最も注目されているハリウッド大作は、6月21日から公開される『インディ・ジョーンズ』シリーズ第4作『インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国』(08年)だが、ハリウッドでは昨年アカデミー賞作品賞、監督賞、主演女優賞、脚本賞の4部門にノミネートされた『JUNO/ジュノ』(07年)のように、時々名もなきインディペンデント映画の良さが口コミで広がり、あれよあれよと言う間に大ヒットすることがあるから面白い。

監督・脚本のニール・バーガーは本作が監督2作目の新鋭だが、原作となった短編小説には、ソフィ・フォン・テッシェン公爵令嬢(ジェシカ・ビール)もレオポルド皇太子(ルーファス・シーウェル)も登場しないとのことだから、彼は原作の骨格だけを生かし、後は自分の想像力でこの脚本を書き上げたわけだ。全米わずか51館の公開でスタートしたそんなインディペンデント映画が、「最大1,438館まで拡大。結果22週にわたるロングランを記録して、同時期公開のメジャー作品『レディ・イン・ザ・ウォーター』や『ブラック・ダリア』などを超える興行収入4千万ドルを達成。観客

の支持はもちろん、多くの映画関係者の注目をも集めた」というからすごい。

ネット情報を調べてみると、好・不評両者の意見が寄せられているが、私はこんな映画大好き。「幻影のなかに事実がある」という大テーマもお見事なら、19世紀末ウィーンという舞台設定も興味深い。『JUNO / ジュノ』に続いて「インディペンデント映画ここにあり！」と誇っていい作品だと私は思うが……。

19世紀末、ロンドン vs. ウィーン

トリックやワナがいっぱいの、天才マジシャン vs. 奇才マジシャンのライバル物語を描いた面白い映画が『プレステージ』（06年）だった（『シネマルーム13』367頁参照）が、その舞台は19世紀末のロンドン。当時のイギリスは、世界最初の産業革命を成し遂げた国だから、世界最高の科学技術を誇ったのは当然。したがって、その首都ロンドンにおけるマジックの世界では、さまざまな科学技術を応用したトリックが工夫され始めており、その焦点は引田天功（プリンセス・テンコー）お家芸の「脱出モノ」……？

それに対し、19世紀末のウィーンはハプスブルク帝国が支配していたものの、プレスシートにある「ハプスブルク帝国崩壊への序曲」によれば、「19世紀末のハプスブルク帝国は、プロイセンに敗戦してオーストリア＝ハンガリー二重帝国となり多民族国家としての問題がさらに大きくなっていった帝国の終末期」とのこと。したがって、ブルジョア（市民）革命と産業革命をいち早く成し遂げたイギリスに比べると、ハプスブルク帝国は旧体制の国。もちろん、音楽の都・芸術の都としてのウィーンは名高いが、この時代のウィーンではマジック（奇術）よりもイリュージョン（幻影）の方が人気が高かったよう。1650万ドルの『幻影師 アイゼンハイム』に対し、『プレステージ』は4000万ドルという製作費の対比だけではなく、『幻影師 アイゼンハイム』を楽しむについては、同じ19世紀末のイギリス vs. ハプスブルク帝国、ロンドン vs. ウィーンの対比をしっかりと。

もっとも、そんな時代のそんな都市を舞台とした映画だが、これはヨーロッパ映画ではなくあくまでハリウッド映画だということもお忘れなく。

第1次世界大戦のきっかけは……？

19世紀末におけるハプスブルク帝国の焦点は、結果的に在位68年にも及んだフラン

ツ・ヨーゼフ皇帝と皇位継承者であったレオポルド皇太子との確執。そんな状況下にある皇太子が酒と女に溺れることはよくあることで、1889年1月30日に発生したのが、レオポルド皇太子とある女性との心中事件である「マイアーリング事件」。オマー・シャリフとカトリーヌ・ドヌーヴの共演でこの事件を描いた映画が『うたかたの恋』（69年）だったが、現実はこの映画のようなロマンティックなものではなかったはず。他方、『幻影師 アイゼンハイム』が描くレオポルド皇太子は、頭脳明晰なりアリストながら、反面策略家・陰謀家の面も。しかして、ホントのレオポルド皇太子像は……？

そんな興味はつきないが、第1次世界大戦が始まるきっかけとなったのは、サラエボを訪れていた皇位継承者とされていたフランツ皇帝の甥のフランツ・フェルディナントが1914年6月28日に暗殺された事件。1889年の「マイアーリング事件」は、確実に第1次世界大戦のそしてハプスブルク帝国崩壊の序曲となったわけだ。そんな歴史的背景を学習したうえで、レオポルド皇太子の言動を観察すれば、一層興味が湧くのでは……？

「幼なじみ」は、2人だけで通用するキーワード

女性候補と黒人候補がギリギリまで大統領候補の座を争ったアメリカに見られるように、民主主義の世の中は少なくとも理念的には「差別」のない社会。しかし、19世紀末のハプスブルク帝国では、王侯貴族と平民は明確な身分上の差別があった。したがって、家具職人の息子として生まれた少年エドゥアルド・アブラモヴィッツは、公爵令嬢のソフィにこっそりと奇術を披露する「幼なじみ」だったが、それは2人だけで通用するキーワード。つまり、身分違いのエドゥアルドとソフィの間に「幼なじみ」などという概念や人間関係が成立する余地はなく、2人がつき合うことすら許されないのは当時の身分制度上当然のことだった。

それから15年。アイゼンハイムと名乗るイリュージニストが芸術の都ウィーンで華々しくデビューし、そのイリュージョンは「芸術の域に達している」とまで絶賛されていた。そのカラクリを解明しようとしたのが、皇帝退位計画を密かに企てていたレオポルド皇太子。皇太子はある日、政略結婚のため婚約者となっているソフィと共に劇場を訪れ、ここに「幼なじみ」が再会することになったが……。

もう1人のキーマンは……？

この映画のキーマンはレオポルド皇太子だが、もう1人キーマンがいる。それは、アイゼンハイムと同じ平民ながら、皇太子から厚い信頼を受けているウール警部（ポール・ジアマッティ）。ウール警部はレオポルド皇太子の命令を忠実に実行することによって、その信頼を獲得し、のし上がっていかうとする野望に満ちた男だが、実は彼はイリュージョン大好き人間……？

皇帝退位計画という大陰謀を実行しようとしているのだから、皇太子はそれに集中すればいいのに、彼のようにヘンに頭が良くて権力欲の強い男は、自分が解明できないイリュージョンがあること自体カンに触るらしい。皇太子がホントに現皇帝を早期に退位させて、自分が次期皇帝になろうとするのなら、人気イリュージニストのアイゼンハイムをその道のプロと認めてかわいがり、それによって国民の支持を集めればいいのに……。そう思うのは、私が小泉元首相のやり方や橋下現大阪府知事のやり方に肩入れしすぎているせい……？

それはともかく、アイゼンハイムを王宮に招いたプライベートなイリュージョン大会で、「エクスカリバーの剣」というオリジナルな演目(?)によって恥をかかされてしまったレオポルド皇太子は、ウール警部に対して「奴を潰せ！」と命じたから大変。これが「イリュージョンのネタを教えろ」「いや教えない」だけなら単なる子供のケンカだが、そこにソフィが絡んでいることがわかると、レオポルド皇太子はがぜん嫉妬心を燃やすことに。このように、男の嫉妬心まで加わったレオポルド皇太子の無茶苦茶な命令を忠実に実行しようとするウール警部は大変。だって、イリュージョンを観客に見せているだけのアイゼンハイムに一体何の罪があるの……？ ありゃ詐欺罪……？ そりゃちょっとムリでは……？

総理大臣の犯罪 vs. 皇太子の犯罪

福田派の継承者たる小泉純一郎首相による「小泉改革」によって徹底的に糾弾されたのが、かつて「今太閤」と呼ばれて絶大な人気を誇った田中角栄首相とその田中の政治そのもの。田中総理の功績は、1960年代の近代都市法の確立や1972年の周恩来との握手に象徴される日中国交正常化など数多いが、1976年以降はロッキード事件によって苦境に立たされることに。この総理大臣を裁く前代未聞の裁判は、1審で有

罪（実刑）（1983年）、2審でも有罪（1987年）となり、上告審途中の1993年に田中角栄の死亡により審理は終了した（公訴棄却）が、法の下での平等を原則とする民主主義国家においては、総理大臣でさえ刑事被告人となることが明らかに。

他方、『うたかたの恋』で描かれたのはロマンティックな心中事件（？）だったが、今回のニール・バーガー監督の脚本では、陰謀家のレオポルド皇太子には女性を殺したのではないかという噂があるらしい。ウール警部らの執拗な監視の中、アイゼンハイムとの密会がバレってしまったソフィは、自らの口でレオポルド皇太子との結婚はありえないとタンカを切り、皇太子の館を飛び出したまではよかったが、怒り狂った皇太子の剣によってソフィは死体となって発見されることに。もちろん、いくら身分差別があっても、徳川時代のように「切り捨て御免」が通る社会ではないから、ウール警部らは犯人逮捕に全力を尽くし、結局容疑者を逮捕したから、これにて一件落着！

しかし、それに納得できないのがアイゼンハイム。ショックのあまり憔悴してしまい、いったんは劇場を閉鎖してしまった彼だが、新たに復活したアイゼンハイムの演ずる演目は、何と死者の魂を甦らせるというものすごいもの。その社会不安を助長する不穏なイリュージョンを取り締まるべく、自らも変装して観客の中に紛れ込んだレオポルド皇太子が見たのは、何と舞台に甦ってきたソフィの姿。これはホントにイリュージョンなの……？ それとも、ホントにソフィが甦ったの……？ すると、甦ってきたソフィは「誰に殺されたの？」との質問にどう答えるの……？ その答えによっては総理大臣の犯罪ならぬ、皇太子の犯罪に発展するのかも……？

さあ、世紀のイリュージョン映画はいよいよ佳境に。

アッと驚く結末は……？

M・ナイト・シャマラン監督の『シックス・センス』（99年）の登場以降、「結末は絶対に明かさなさいで下さい」というタイプの映画が増えている（？）が、『幻影師 アイゼンハイム』もその1つ。マジックやイリュージョンにタネがあるのは当たり前で、観客はそれを見抜けないから、その芸に感心して拍手を送るわけだ。

この映画には、人生訓とも言うべき大切な文章が2つある。その1つは「すべてを欺いても手に入れたいもの、それは君」、そしてもう1つは「幻影の中に事実がある」。前者の「手に入れたいもの」とはもちろんソフィのこと。身分違いという障害の他、今やレオポルド皇太子の婚約者という大障害は絶対に乗り越えられないはずだから、

いくらアイゼンハイムがソフィを手に入れようとしてもそれは到底ムリ。また後者も、言葉としては十分理解できるが、それで理解していると思っっているうちはあなたは騙されているだけ……？

ウール警部の執拗な捜査によって次第に明らかになってくるレオポルド皇太子の罪は……？ そして、アイゼンハイムがソフィを手に入れるために仕掛けた一世一代のイリュージョンとは……？ あなたがウール警部と同じようにこの映画の結末にアッと驚いたら、ベストセラー作家スティーヴン・キングが「何度でも観たくなる！」と絶賛し、2006年度のトップ10に推薦したという話にも納得できるはず！

2008(平成20)年6月10日記

ミニコラム

できるなら、^{チュ・ジンシル}崔真実も甦らせて！

今年も、日本では緒形拳、米国ではポール・ニューマンという名俳優の訃報が届いたが、08年10月2日の新聞各紙は、韓国チュ・ジンシルの国民的人気女優崔真実(39歳)の自殺事件を報じた。『誰が俺を狂わせるか』(95年)と『手紙』(97年)で観た彼女はすごくキュートな美人だったが、00年に巨人の趙成岷チュ・ソンミン投手と結婚し2児をもうけた後、04年に離婚。この間その美しい姿はスクリーン上で観ることができなかったわけだ。しかし、離婚後は芸能界へ復帰し、「妖精チュ・ジンシル崔真実からオバタリアンになって帰ってきた」と言われていたから、えらいもの。

そんな彼女の自殺の原因は一体ナニ？ それは、自殺したある男性タレントに彼女が大金を貸していたという

悪質な噂がインターネット上に広まったことによる精神的落ち込みらしく、昨年の2人の女性タレントの自殺に続く「新たな犠牲者」と受け止められている。また彼女は離婚後うつ病に悩まされ、精神安定剤を常用し、ここ数年はその服用量が増えていたらしい。

これを契機として「自殺大国」の韓国でネット書き込みの実名義務化などの規制を強める法案の是非が議論され始めたのは当然だ。彼女の自殺は風呂場のシャワーブースで首をつったものらしいが、「美人薄命」とはまさにこれ。幻影師アイゼンハイムは映画の中で、死んだはずの恋人ソフィを見事甦らせていたから、もしできることならチュ・ジンシル崔真実も甦らせて！

2008(平成20)年10月24日記